

## 双語教育における道德教育の実施について：ウイグル族の事例を中心に

アナトラ，グリジャナティ  
中国新疆師範大学言語学院：准教授

<https://doi.org/10.15017/7385179>

---

出版情報：国際教育文化研究. 14, pp.81-89, 2014-08-28. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



## 双語教育における道德教育の実施について —ウイグル族の事例を中心に—

アナトラ・グリジャナティ

### はじめに

新疆における漢語受容は、社会生活全体における双語「受容」と教育における双語「導入」の二つの側面に分けて考えることができる。そしてこれら両側面は中央政府による国家統合の基本方針にそって相互に緊密に関連しながら全体の漢語受容の流れを形成している。前者に関しては、社会経済体制における漢語中心的編成がウイグル社会の漢語受容を促している。改革開放政策に端を発した経済の市場化や経済開発の推進、そしてそれにとまなう漢族の少数民族地域への大規模な移住などにより、少数民族はきびしい経済競争下に置かれるようになった。さらに莫大な経済投資をもたらす「西部大開発」の推進がこれに一層の拍車をかけた。現在、新疆ウイグル社会では社会経済活動におけるコミュニケーション手段としての漢語の需要が高まり、また双語教育の推進を通して民族教育における漢語の比重も高まったことで、少数民族の子どもたちの生活世界を構成してきたウイグル語中心の言語環境は急速に変化しつつある。なかでも漢族人口が多数を占め経済・行政の中核都市であるウルムチでは、こうした漢語受容の先進地域として子どもの言語環境における変化を先取りする実態が見出せる。こうした双語ないしは漢語の受容によって、ウイグルの子どもたちの漢語レベルは以前より向上された。それと同時に彼らの自民族の文化にそった道德規範に関する意識が薄くなりつつある。本稿では、漢語を教授用言語とする双語教育において、ウイグル族の文化にそった道德教育がどのように実施しているかという問題について考察を行なう。まず、中国における道德教育のあり方を概観し、ウイグル社会における道德教育の特徴とその社会的役割を述べる。次には、新疆における双語教育の現状を把握し、その発展趨勢を示す。最後に、漢語を教授用言語とする双語教育のなかでウイグル族の伝統的な道德規範や価値観などをどこで、どのようにして子どもたちに伝わっていくかという問題について考察を行なう。

### 1. 中国における道德教育

道德教育は、個人にとっても社会全体にとっても大切なことである。それぞれの家庭によって、子どもに対するしつけが違っているように、それぞれの国や社会の違いによって、国民に対する道德教育の内容や方法も異なっている。日本における道德教育は、豊かな心をはぐくみ、人間としての生き方の自覚を促し、道德性を育成することをねらいとする教育活動を意味している。平成18年12月に改正された日本教育基本法第1条において、「教育は、人格の完成を目指し、平和的で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民を期して行わなければならない」と「人格の完成」を目指すことが教育の目的とされており、道德教育の目指す方向と合致している。また、同基本法の第2条においては、道德教育の目的を実現するための従来の目標（個人の価値の尊重、正義、責任など）に加え、新たな目標が示されている。それは、新たに主体的に社会の形成に参画するこ

と、生命や自然を大切に、環境の保全に寄与すること、伝統と文化を尊重し国を愛し、他国を尊重し、国際社会の発展に寄与することなどである。こうした目標からは、日本の教育基本法の規定が人間形成の基盤を規定し、道徳教育の充実の方向性を示していることが分かる。

中国における道徳教育は、思想・政治教育を内容とする教育である。1949年10月中華人民共和国が成立してから、中国共産党中央政府は「徳育、知育、体育」の前面に発達した児童・生徒を育成することを中国の教育指針と定めた。「徳育」のほうには、すべての学校において、「政治」という道徳教育科目が設けられた<sup>①</sup>。当時の道徳教育の内容は、ブルジョア思想を批判する一方、社会主義思想を宣伝することであった。改革開放や市場経済の導入によって、1980年代から人々の物質生活が豊かになり、それが人々の価値観にも影響を及ぼした。特に、若者の間では、個人のことを中心に考慮し、他人に対する思いやりや社会に貢献する意識が薄くなってきた。社会変化による生活の多様化が子どもたちの社会化プロセスに影響を与え、子どもたちに「正確な価値観」を教える道徳教育が必要となったのである。

こうした背景のもとで教育関係者の間では、思想・政治教育を行なうだけでは不十分であることが指摘され、道徳教育の内容や、道徳教育を一つの学問として議論されるようになった。道徳教育の内容について麦志強(1999)は、「1980年代、徳育の内容が豊富になり、次第に道徳教育の簡略化された名称として徳育というのは狭義だということになった。徳育の拡大の必要に迫られ、道徳教育、政治思想教育、人生観・世界観の教育、法教育等をみな徳育の概念に入れ、広義の徳育の概念が出現した」<sup>②</sup>という。そして、麦志強(1999)によれば、徳育には、「道徳教育の簡称」、「思想品德教育、品德教育」、「思想政治教育、政治思想教育」、「理想教育、道徳教育、規律教育」、「思想教育と政治教育と道徳教育の総称」、「‘四項’の基本原則の教育と道徳養育の総称」、「愛国主義教育、集団主義教育、労働教育、社会主義理想教育、共産主義理想教育」、「人となる教育」、「知力の要素ではない教育」との多様な教育が含まれている。

さらに、朱曉宏(2003)は、「我が国の道徳教育の現状から見ると、道徳教育の外延はとても広く、世界観と人生観の教育、政治教育、品德教育を包括する」<sup>③</sup>と述べている。朱曉宏(2003)は、また、「意識形態、政策上も、“道徳”を“政治”、“法律”、“世界観人生観”で代替することはできないし、“政治”、“法律”、“世界観・人生観”を“道徳”の付加成分を見なすこともできない」とし、「道徳と政治意識の形態の連携は密接で、その支配と制約を受け、道徳も鮮明な政治性を備えている」<sup>④</sup>と、中国では道徳と政治は互いに左右されていると述べている。

中国「中小学徳育工作規程」(1998年3月)では、その第2条に、「徳育はすなわち、児童生徒に対して政治、思想、道徳、心理品質教育を進めること、これが小学の素質教育の重要な部分であり、青少年の健康的な成長と学校工作の方向、動力、作用を保障するものである」と、学校教育のなかでの徳育の重要性について述べている。第3条には、「小中学の徳育工作は必ずマルクス主義、毛沢東思想、登区小平理論の指導を堅持し、正確な政治方向を定めることを第一義とする」と、その政治性を明確に打ち出している。第4条では、「小中学の徳育工作は、本地区の実際の青少年児童の実際から出発し、小中学生の思想品德の形成の規律と社会発展の要求に従い、小中学のすべての徳育体系を決める」と、小中学生の状況、地域の状況を踏まえて道徳教育を行う柔軟性を説いている。第5条には「小中学の徳育工作の基本任務は、児童生徒が社会主義祖国を熱愛し、社会公德、文明的な行為を行う習慣を備え、法を守る公民となるよう養成することである」と愛国主義が強調されている。

このように、中国においては、どの地域でも道徳教育と政治が不可分の関係にあり、むしろ道徳教育と政治教育

の一体化こそが重要だと認識されている。本稿で扱う道德教育は、ウイグル社会で重要視されてきた子どもに対するしつけのあり方や礼儀作法を指している。

## 2. ウイグル社会における道德教育とその社会的役割

ウイグル社会における道德教育は、「人としてどうあるべきか」を起点としている。親及び年長者は、常に「alim bolmaq asan, adem bolmaq tæs」(科学者になるより、真人間になるのが難しい)という諺を用いて、子どもたちにウイグルなりの道德観念を教え込む。つまり、親が子どもの教育にあたっては、人となるには、まず道德をもち、人となりを学ぶことを重視する。ウイグル社会におけるこうした道德観の形成は、ウイグルの人々の世界観、生活方式、生産方式、風俗・習慣、文化・伝統と密接な関係がある。現地でウイグル族の民俗学者として知られている Enwer・Rozi(2006)は、ウイグル族が経てきた政治、経済、社会的環境、宗教・信仰等の社会的側面からウイグルの人々の道德教育の形成やその特徴を分析し、ウイグル族の道德教育が宗教の影響を大いに受けていることと、その及ぶ範囲が非常に広いことを指摘している。ウイグル族の生産方式に関わる道德規範は、遊牧、農業、園林、手工業、商業、学術等の様々な分野の職業道德基準を含んでおり、どの分野の道德教育も「善行をする、悪事をしない」ことを根本的な基準としている。

周知のように、道德教育の機能は主に社会、生活、個人などの三つの側面において発揮される。道德教育と社会の関係は、主に正義の機能となって現れ、正義感や責任感のある良き市民の育成に重きが置かれる。道德教育と生活の関係は、主に幸福の機能となって現れ、幸せな生活の創造に重きが置かれる。道德教育と個人の関係は、主に意義の機能となって現れ、自立心や責任感、そして豊かな人間性がある善人の養成に重きが置かれる。

ウイグル族の道德教育と社会の関係についていうと、古から今に至るまでウイグル族の伝統的な道德規範は、人々の言葉や行為をコントロールし、管理する役割果たしてきた。また、子どもたちの文化化、社会化プロセスにおいても重要な役割を果たしてきた。ウイグル社会における道德規範には、確かにイスラム教の道德観念が含まれているが、しかし、それはまた宗教道德観とは違って、法律とも区別される。したがって、ウイグル族の集団にとって、道德規範は強制的なものでもなければ、権威あるものでもなく、一種の思想形態として、世論の力を利用してウイグル社会における好ましくない行為を抑制している。「公正な法律と崇高な品德は、社会を発展させ、個人を幸福にする前提である」<sup>⑤</sup>というように、従来のウイグル社会において道德教育は社会と個人にとって、法律と同じ重みのある存在であったと言える。

道德教育の個人に与える影響は、子どもの人格形成、情操の陶冶、知識の獲得、主体性を養う等の側面からうかがえる。人には先天的な道德性が具わっているが、人の思想、感情、性格、行為等の特徴は決して先天的に与えられるものではなく、一定の社会文化のなかで養成されるものである。ウイグル社会において、親孝行、年長者への尊敬、老人への礼儀などは、青少年が具えなければならない当たり前の道德行為である。ウイグル族の家庭では、子どもの話しぶりが上品であること、煙草を吸ってはならないこと、飲酒してはならないこと、身なりが身分や年齢に合うことなどが厳しく教育される。古典的著作『チュルク語大辞典』や『福乐智慧』のなかでも、子どもの言葉使いに注意すべきこと、真人間になることの大切さなどウイグル族の伝統的な道德教育に関する内容が収められており、道德教育が人格形成や情操の陶冶等に重要な影響を与えることは読み取れる<sup>⑥</sup>。

そして、ウイグル社会において、伝統的、民俗的な道德規範の一部は今日も実際の子育てやしつけのなかに維

持されている。そのなかで子どもの性別によって、道德規範の厳しさが異なっており、女子には相対的に厳しく、男子にはゆるやかである。それは「Qiz bala bolxandiki (女の子だから)」あるいは「Oxul bala tursa (男の子だから)」という日常的表現によって促される。女子に対して、ウイグル社会で望ましい女性あるいは母親の資質を備えていると求められる。

ウイグル族の道德教育は、その特有の調整機能と抑制機能を生かし、人間関係を調整し、好ましくない行為を抑制し、社会の秩序と安定を維持している。その内容が民族文化（イスラーム）に深く関連している場合、ウイグル語にしかそれを適切に伝えられない場合も多い。そしてこれは子どもの人格形成にも深く関係している。例えば、ウイグル族の家庭ではいつも「jaman bolidu（～をしてはいけない）」という言葉を用いて、子どもが食べ物を見舞にしたり、身障者や弱者をいじめたり、他人の利益を横取りしたりなど道德規範に反する行為を禁じている。同じように、言ってはならない粗雑な言葉を口にすることも戒め抑制している。さらに、「Jykri (満足する、満足に思う、感謝に思う、飽くに思う)」という言葉を用いて子どもに、今もっているすべてに対して満足し、暴利を貪る心をもたないように教え導く。「halal (ハラルである、清廉で公正である、純潔無垢である、まじめである)」という言葉を用いて、子どもに飲食文化上のタブーを理解させるだけでなく、子どもが是非を分別するように教え導く。すなわち、親が子どもたちに他人に頼らず勤勉に働き、自身の力で生活を維持すること、他人の利益を横取りしてはならないことを教え込み、子どもが正義感をもった社会人になるように導いている。「jaman bolidu」、「Jykri」、「halal」は、宗教的な道德規範の日常生活における応用であり、石中英 (1999) がいうように、「素朴な信仰と道德の圧力」は、日常生活のなかで道德教育の役割を活かす一つのルートである。

上述したように、道德教育は、ウイグル社会において、人格形成、民俗習慣の維持、人間関係、ウイグル社会で望まれている礼儀正しさなど様々な領域において、かけがえのない社会的機能を発揮している。どんな民族にも独自の道德教育があり、またそれを表す独自の表現方法がある。道德規範における具体的な内容の中には、ウイグル語を通してのみその正確な説明やニュアンスの伝達が可能になり、その深い意味や教育的な役割が表現される。あるいは、他の言語に訳し表すと、その本質的なものが上手に伝われないことも考えられる。従来、ウイグル族の道德教育は家庭教育と学校教育によってその機能が発揮されていた。社会の発展と双語教育の普及にともない、ウイグル族集団の言語生活に変化が現れ、それが道德教育のあり方にも影響を与えつつある。

### 3. 新疆の双語教育の現状と発展の趨勢

筆者のこれまでの研究で取り上げたように、ウイグル社会における双語教育は、漢語を一つの科目とした教育モデルから、漢語を教授用言語としたモデルへ転換した。少し遡って、中華人民共和国が成立した時期の少数民族言語政策を見てみると、1949年に制定された「中国政治協商会議共同綱領」およびこれを土台に制定された1954年の最初の憲法は、いずれも「各民族はすべて自己の言語文字を使用および発展させる自由を有する」と定め、少数民族言語政策の遵守すべき基本的な理念を明らかにしていた。少数民族の言語に対する保障は、公務、教育、訴訟など様々な領域にわたっており、教育に関しては、現在通用文字を持っている民族の小中学校（高校を含む）の各種教科は、必ず自民族の言語文字で行うことが保障されていた。それは「大躍進運動」や「文化大革命」時期を除き今日まで生きている。2000年に公布された『中華人民共和国国家通用言語文字法』では、漢語と規範漢字は全国における通用言語として法的に位置づけられ、同時に第8条では、「各民族は自己の言語文字を使用し、発展さ

せる自由を有する」と改めて強調され、「少数民族言語文字の使用は憲法、民族区域法および他の法的規定を依拠とする」と補足されていた。

すなわち、ウイグル社会における従来の漢語教育はあくまでも自由に選択ができる1つの科目とし、新疆の主体民族であるウイグルの人々の自民族の言語・文字で教育を受ける権利を重視する前提で、民族教育のなかに導入されていた。しかし、改革開放政策の導入を契機として、漢語はウイグル社会の経済発展を促進し、人々に物質的な豊かさを与える手段として重要視され、漢語教育を強化する政策が次々と打ちだされた。その結果、「双語教育」という名目でのもとで漢語教育は幼児教育をはじめ、各教育段階に取り入れられ、その一層の普及や拡大が図られた。

さらに、2011年に、新疆ウイグル自治区教育厅が「十二五」教育発展計画を制定し、「新疆ウイグル自治区少数民族学前及び小中学校“双語”教育発展計画（2010-2020年）」を着実に実施することを求めた<sup>⑦</sup>。同時に、次のような詳細な目標も定めた。すなわち、（1）2015年までに、少数民族系小中学校において双語教育を基本的に普及させ、双語教育を受ける少数民族の児童生徒数を全生徒数の75%までに増やす。とりわけ、義務教育段階の双語教育生徒数を80%までに増やすこと。（2）2020年までに、双語教育を受ける児童生徒数を全生徒数の90%までに増やし、義務教育段階の双語教育生徒数を95%までに増やすことが目標である。

現在、新疆の各地域では、「模式一」と「模式二」の二タイプの双語教育が実施されている。「模式一」とは、小学校において「漢語」<sup>⑧</sup>、「算数」、「社会」、「情報技術」などの科目を国家通用言語（漢語）で行い、他の科目を民族言語で行う。中学校と高校においては、「漢語」<sup>⑨</sup>、「算数」、「物理」、「化学」、「外国語（英語）」「生物」、「情報技術」を国家通用言語（漢語）で行い、他の科目を民族言語で行うタイプである。「模式二」とは、学教育段階において、すべての科目を漢語で行い、民族語を一つの科目として設けるタイプである。「模式二」では、条件が整っていない学校では「体育」、「音楽」、「芸術」等の科目は民族語を用いて行うことは認められている。どちらの「模式」においても、漢語が教授用言語と定められている科目における少数民族言語の使用は、15%以内に収めることが求められている。

小野原によれば言語（ことば）には2つの機能がある。ひとつは符号（言語記号）が本来的に持っていると考えられる意味（指示的意味など）を情報として伝えるコミュニケーション機能である。もうひとつはことばを使用することを通して、自分の存在を主張したり、確認したり、あるいは自分の価値を証明したりするアイデンティティ機能である<sup>⑩</sup>。教師がことばを用いて子どもたちに伝えるものは、知識だけではない。自分の情緒や感情、性向や態度等もことばを通して表明し、また、しつけなどにもことばを用いる。その場合、自然に口にするのが教師にとって馴染みのある母語<sup>⑪</sup>（ウイグル語）であり、彼らにとって他の言語に代わることができない重要な機能を果たしていると考えられる。なぜならば言語にはその社会、民族の文化が織り込まれており、したがって文化化のプロセスもそうした民族語を通してはじめて可能になると考えられるからだ。

筆者が昨年の11月下旬および今年の6月上旬に行った現地調査では、2015年までに達成させる予定の「義務教育段階の双語教育生徒数を80%までに増やす」という目標はすでに達成されている。さらに、アクス、カシュガル、ホータン、カルマイ、イリ、アルタイなどの地域でランダムサンプリングとして調査を行った約50の小中学校の六割以上が「模式二」の双語教育モデルを選んでいいる。すなわち、町から離れている田舎の小中学校でも漢語を教授用言語とする双語教育モデルが広がりつつある。以下では、「模式二」の双語教育モデルの普及や拡大プロ

セスにおいて、ウイグル族の価値観、民族の伝統や風俗習慣および道德規範などを子どもたちにどこで、どのように伝えていくかという問題について考えていきたい。

#### 4. 双語教育における道德教育の現状

学校においては教科書による教育が行なわれているだけではない。子どもたちは学校で自民族の言語が使われる集団の中で同じ仲間との出会い、人間関係や遊びなどを通して民族文化や習慣を自然に身につけていく。そうしたなかで教師の子どもへのしつけや態度（褒め方あるいは叱り方など）には、自民族の文化に基づく価値観がふくまれている。王軍（2006）は教育人類学の視点から伝統的な民族文化が人々の知性と非知性的要素の形成に与える影響を分析し、伝統的な民族文化の継承の必要性を指摘している<sup>⑩</sup>。王軍（2006）によれば、人々の観察力、記憶力など各種の知性的要素は、先天的に形成されたものではなく、後天的な社会実践を通して徐々に発達してきたものである。知性の発達と独特な知性的特徴の形成は、具体的な文化継承の過程に依っている。また、伝統的な民族文化には、人々の人格形成に影響する非知性的要素も含まれている。確かに、民族文化は人々の知性的発達を促す教育機能を有すると同時に、子どもたちの人格形成など文化化プロセスにも影響を及ぼす。子どもたちは自ら属する民族集団の伝統文化に接し、その民族特有の知性的・非知性的なものを身につけていく。その知性的ないしは非知性的なものの中には、自民族の言語にしか伝われないものもある。

子どもが、子供ら独自で、あるいは保護者や教師をはじめとする大人からの示唆や指導を受けながら従来のウイグル社会では、子どもたちの人格形成など文化化プロセスに影響を及ぼすこうした知性的・非知性的なものは家庭と学校教育を通して子どもたちに伝わってきた。家庭では、子どもたちが親や他の家族の影響ないし指導を受け、性格の基礎をつくったり、生活経験や社会知識を獲得したり、言語や行動規範を身に付けたり、自民族の文化常識を見習ったりする。日本語に「三つ子の魂百まで」とあるように、ウイグル社会でも「幼いころに受けた教育によって形成された性質・性格は、死ぬまでにも根底は変わらない」という考え方がある。こうした考え方から基本的な生活習慣や教養は家庭教育によって形成されるものに違いない。教育学者雷通群（2008）は人間が最初に受ける家庭教育の内容は、実際に伝統的な民族文化にそった教育であると指摘し、道德教育における家庭の重要性について以下のように述べる<sup>⑪</sup>。すなわち、①人は家にいる時間がもっとも長く、受ける刺激も多く、感化力はもっとも強い。②家庭では家族間の主観的感情がもっとも深いし、一方が他方の影響を受けやすい環境が整っており、生活習慣や性格が形成しやすい。③親の厳しいしつけが子どもの悪習慣や非道德的な行為を是正する。こうした考え方からしてはウイグル族の文化にそった道德性や道德基準は家庭教育を通して子どもたちに伝わっていくべきであろう。

幼児教育が普及する前、ウイグル族の文化にそった生活習慣や道德教育は確かに家庭で行われ、子どもたちが小学校に入った時点では、ウイグル社会で求められていた行動様式を身に付けていた。そして、従来の学校教育では、知識の伝達や成績を向上させることを重視すると同時に、子どもたちの道德的実践力を高めていくことも重要視されていた。学校教育における道德教育は家庭教育と一貫性がある、家庭で身につけていた道德性は学校教育を通してさらに強固され、揺るぎない「ウイグル的な」道德観が形成されていた。しかし、幼児教育それ自体がまだ緩やかな発展段階にあったウイグル社会では、2004 年から早期双語教育が導入され、小学校と代わりのない教育が行われるようになった<sup>⑫</sup>。その結果、本来の幼児教育の基本指針である生活習慣の形成や道德性の芽生えを培うな

どのことは十分に行われなくなった。そして、従来の小中学校では、ウイグル文化にそった指導（しつけ）が行われ、「Uyghur Edebiyati（ウイグル語文）」、「地理」、「歴史」などの科目を通してまず自分たちが詳しい民族の風俗習慣や価値観に触れながら授業を進めていた。また、「助け合いながら勉強する」、「互いに傷つけないようにする」といった「協調」意識を育てることが重視されおり、学校の教育活動全体を通して、ウイグル社会で求めている道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的实践力を育成することが大事にされていた。

ところが漢語を教授用言語とする双語教育の普及とその拡大によって子どもたちを取り巻く言語環境や学習環境が大きく変化し、漢語の受容に伴って漢文化も知らず知らずに受容し、ウイグル的な風俗習慣や価値観の変容と世帯間との文化的一貫性が崩れている。一方、家庭においても学力の向上ばかりが求められ、家庭や地域が果たしてきた教育機能が低下し、社会全体のモラルも低下しつつある。子どもたちを取り巻くこうした社会的変化は、成長期にある子どもたちの道徳性の形成に大きな影響を与えている。これは、もちろんウイグル社会のみ問題ではなく、他の地域でも共存している現象でもあり、それが決して双語教育が出した結果でもないということを断っておきたい。

一昔、ウイグル社会において、民考漢らに対してウイグル語や慣習における「ウイグル人らしさ」の喪失<sup>⑧</sup>が指摘されていたが、そうした「ウイグル人らしさ」の喪失は、現在双語教育を受けている「准民考漢」<sup>⑨</sup>にも見られている。子どもたちの日常的また非日常的な場面における言葉使いや行動様式に注目してみると、彼らにウイグル社会で求めている基本的な道徳性や礼儀作法が欠けているように思われる。これは、家庭や学校における教育のあり方が大きく変わったことと関連していると考えられる。親や学校側も子どもたちの道徳意識が薄れていることを指摘しているが<sup>⑩</sup>、子どもたちの道徳意識を向上させるしつけないしは教育は家庭で行うべきか、それとも学校で行うべきという点について意見が異なっている。学校側としては、ウイグル文化に即したしつけや道徳教育を家庭で行うことを求めている。従来は、どんな家庭でも「alim bolmaq asan, adem bolmaq tēs」（科学者になるより、真人間になるのが難しい）という諺を用いて、子どもたちにウイグルなりの道徳観念を教え込んでいたが、現在は幼稚園から学力を向上させることしか考えない親が増えている。子どもたちの中には、親の意思あるいは本人の意思で、下校後に塾や語学の勉強に行き、土日曜日は習い事に行く子が増えている。親たちの話によれば、子どもたちの宿題が余りにも多いため、家庭では勉強と関係のない話はしないようにし、家族がそろって会話を交わすことや食事を一緒に取ることも少なくなっており、学校が道徳教育をしてくれることを期待している。こうした傾向から、学校教育でも家庭教育と一貫性を持って行っていたウイグル文化にそった道徳教育が、漢語を教授用言語とする双語教育に変えられた学校教育では行われていないことがうかがえる。

## おわりに

言語は人類の生活世界を映す鏡であり、言語をもってそれぞれの民族社会における、習俗、価値観、倫理道徳観を如実に表現することができる。そして、言語はまた特定の時期の人々がもつ社会的文化、生活、習俗や思考方法（イデオロギー）を反映する。本稿では、漢語を教授用言語とする双語教育において、ウイグル族の文化にそった道徳教育がどのように実施しているかという問題について考察を行なった。従来の学校教育は家庭教育と一貫性をもって、道徳教育を行っていたが、現在はウイグル文化にそった道徳教育はそれぞれの家庭で行う親の責任とされて



いる。道德教育は、確かに家庭で親が行う当たり前の教育ではある。しかし、現在子どもたちの学校にいる時間は家庭にいる時間より長く、親や他の家族に接する時間も限られている。こうした中、これからの学校は、家庭や地域と一体となって、子ども一人一人の道徳的自覚を促し、人間としてよりよく生きていく道徳的実践力を育成する必要があると考える。そのためにも、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育を一層充実しなければならない。そして、社会生活全体における双語「受容」と教育における双語「導入」が以前より拡大している中、学校教育においてウイグル語を使用する教育場面を増やし、ウイグル語にしか伝えられないウイグル文化なりの道德規範を子どもたちに伝えていく必要があると考える。それによって、伝統的な道德規範の現代教育における価値を高めることができ、さらに現代教育の進展を促し、学校の「教書育人」（知識を教え、人を育てる）と文化継承の役割を果たすことが期待できると考える。

〔付記〕本稿は、「双語教育中少数民族文化伝承研究」（040413B02）、自治区普通高校人文社科重点研究基地「新疆少数民族双語教育中心」の研究助成を受け行われた研究成果の一部である。

- 
- ① 倪冬岩「中国における道德教育の動態」『現代社会文化研究』No38、2007年、115-132ページ。
  - ② 麦志強「1 概論」謝国基等編著『現代中小学德育研究与探索』科学出版社、1999年、2ページ。
  - ③ 曉宏「公民教育」教育科学出版社、2003年、15ページ。
  - ④ 同上、15ページ
  - ⑤ 艾尼瓦尔・赛买提著『ウイグル伝統道德』新疆人民出版社、2006年、85ページ。
  - ⑥ 同上
  - ⑦ 新疆ウイグル自治区人民政府《新疆ウイグル自治区少数民族学前及び小中学校双語教育發展企画（2010-2020年）》新政発〔2011〕30号。
  - ⑧ ここで言う「漢語」は、従来、少数民族の子どもたちを対象にした語学の科目ではなく、漢族の子どもたちが習っている「語文」、すなわち「国語」である。
  - ⑨ 同上
  - ⑩ 小野原信善・大原始子 2004『ことばとアイデンティティーことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探し』三元社、4ページ。
  - ⑪ 新疆の小中学校で教師を務めている人の中には、ウイグル語を用いて教育を受けた人がまだ多数をしている。そのため、ウイグル族の教員たちにとっては自然に使いこなせることばは母語である。
  - ⑫ 王軍「文化伝承の教育人類学研究」『民族教育研究』、2006年第3期、9-14ページ。
  - ⑬ 雷通群著『教育社会学』福建教育出版社2008年、46-54ページ。
  - ⑭ アナトラ・グリジャナティ「幼児教育にみる中国新疆ウイグル自治区の双語教育」『アジア教育』第2号、2008年、12-23ページ。
  - ⑮ 坂元一光・シリナイ・マソティ 2007「中国少数民族の言語と集団間関係の新局面—新疆ウルムチの「民考漢」を中心に」九州大学大学院教育学研究紀要、第9号。
  - ⑯ 一昔は、幼いころから漢族を習い、漢族学校へ入学し、大学入学試験を漢語で受ける「民考漢」と対比的な「民考民」というのがあった。しかし、現在は、漢語を教授用言語とする双語教育の普及やその拡大によって小学校から高校卒業するまですべての科目が漢語で行い、「ウイグル語文」だけをウイグル語で行う教育体制になっている。そうすると、「民考漢」と「民考民」の違いは主に「ウイグル語文」の習得と担任や各科目を担当する教師らが漢族かウイグル族かという二点になる。そのため、現在の双語教育を受けている子どもたちと「民考漢」には大きな違いは見られない。
  - ⑰ 筆者がウルムチ市にあるA中学校で行った双語教育に関する調査で得たデータによるものである。

On the implementation of moral education in bilingual education  
--- Focusing on the example of the Uyghur ethnic group ---

Guljennet ANAYTULLA

This paper reflects on the way moral education reflecting the culture of the Uyghur ethnic group is implemented within the framework of bilingual education with Chinese as the language of instruction. Firstly, it appraises the state of moral education in China, and establishes that as moral education is inseparable from politics, that very unity is regarded as important. Next, elaborating on the characteristics and social role of moral education in Uyghur society, it is explained that moral education performs an irreplaceable function in various areas like character formation, preservation of folk customs, human relations and courteousness as demanded in Uyghur society. Furthermore, the present state of bilingual education in Xinjiang Uyghur is outlined, and the trends of its development are highlighted. Lastly, while explaining the condition of traditional moral education of the Uyghur ethnic group, it shows the necessity for stimulation of moral awareness in every child by the combined efforts of school, family and community, and for nurturing powers of moral practice in order to live in a better way as a human being.